

## 『満漢並香集』 訳注 (二) \*

荒木 典子

はじめに

前号に引き続き、『満漢並香集』訳注第二章に入る。内容は、『西廂記』の一文“待颺下教人怎颺”を取り出し、第一章で鶯鶯に一目惚れした張生が諦めるべきかと逡巡しながらもひたすら思いを募らせていく様子を描くものである。既に述べたように、この作品は京都大学人文科学研究所「東方学デジタル図書館」で全文を閲覧することができるが、2018年秋に現地で現物を閲覧する機会を得た。本稿末尾に掲載した写真(「東方学デジタル図書館」より)からもわかるように、周囲と比べ色の濃い、シミのように見える部分が点在する。例えば章の標題“借廂”に相当する満文 *tatara boo be baiha* の周りがその一つである。現物を手に取ってみたところ、これは文字の部分を残して周りをくり抜き、裏から何も書かれていない紙を貼り付けているためだとわかった。全文を通してこのような加工により色の違いが生じている。或いは文字の周りに書かれていた情報を削除するためだろうか。このような箇所は非常に多いが、章の標題の満文訳に関してはすべてこのような加工が見られる。それもほぼすべてが、下の方まで長く切り取られている(今回の第二章標題の切り取り方はそれほど長くない)。標題の満文訳は、本来、もっと長かったのではないだろうかと推測している。

### 【凡例】

- ① 満文各行の左端の数字は順に、葉数、表裏、行数を表す。葉数は書かれていないので一巻ごとに筆者が数えたものを記す。
- ② 3行1セットで、上から満文、日本語訳、漢文の順に記す。日本語訳は満文の逐語訳としたためやや生硬である。
- ③ 転写の方法はメルレンドルフ式に必要な修正を加えたものである<sup>1</sup>。

- ④ 『繡像西廂時藝』（『時藝』）は早稲田大学図書館蔵本を参照した。本書には挾批も見られるが異同調査の対象外とする。
- ⑤ 適宜『満漢西廂記』も参照した。テキストは京都大学人文科学研究所蔵、康熙四十九年序刊本（上記「東方学デジタル図書館」で閲覧）に拠る。

転写と訳注・第一冊（第二章）

- 13a1 bing hiyang ji bithe >  
並香集  
並香集
- 13a2 jai fiyelen >  
第二章  
第二章
- 13a3 tatara boo be baiha  
泊まる部屋を求めた  
借廂
- 13a4 amu akū dobori geretere akūmbume gūninjafi > wargi  
眠らず 夜明けまで 尽くして 思案して 西の  
無眠一夜思量遍 借
- 13a5 ashan-i boo juwen bufi > acabure tusa ararao seme  
傍の部屋を借りて 希望に合う利益をもたらすかと  
寓西廂 倣個周方
- 13a6 baire de > gocishūdame doroi jaka > hontoho afaha  
求めたので謙遜して 贈り物 半枚の  
假説人情紙半張<sup>2</sup>
- 13a7 hoošan seme gisurehe >> icihyanjame gamame yabure  
紙と言った 処理して携えて 行く  
打當欲把行雲盼<sup>3</sup>
- 13b1 tugi be hargašaki seci > tob seme hūng niyang be

雲を仰ぎ見たいというところでちょうど紅娘に  
恰遇紅娘

- 13b2 ucaraŋi > dorgi gūnin be tucibuŋi giyang giyang-i  
出会い 内心を外へ出し 一つ一つ筋道を立てて  
訴與衷腸
- 13b3 alaha >> ereni bodoci šusai niyalma balama mujangga >>  
話した そこで判断すれば 書生のわがままに違いない  
措大<sup>4</sup>原來直恁狂
- 13b4 dergi ucun i gebu ts'ai sang dz >  
右の詞の名は 采桑子  
右詞 采桑子<sup>5</sup>
- 14a1 andubuki seci > niyalma be adarame andubu sembi >  
思い切りたいと言っても 人をどうして思い切ることができよ  
うか  
待颺下教人怎颺<sup>6</sup>
- 14a2 mujilen tere niyalma de hing seci > wajirakū gūnimbi >>  
心はあの人を 心を込めて 果てしなく考える  
心乎其人者 何日忘之也
- 14a3 niyalma > aikabade mujilen de fita falihangge waka oci >  
人はもしも心に固く結ぶことをしないならば  
蓋人 非固結於心
- 14a4 anduburakūngge akū >> te hing seme gosiha be  
思い切らないことはない 今、一心に愛した人に  
未有不颺下者也 既心乎愛矣
- 14a5 dahame > niyalma kemuni andubume mutembio >> tuwaci > yaya  
出会い 人はなお思い切ることができるのか 見れば すべての  
而謂人能颺之哉 見夫
- 14a6 niyalma > daljakū adali umai haji akūngge be > udu

- 人 関与しないかのように全く愛しくないものをどれだけ  
人 於漠不相關者 雖
- 14a7 sabucibe > gūnirakū > udu gūnicibe > inu gaitai  
見ても 気にならない どれだけ考えてもやはりにわか  
見之 而不相思 即思矣 或偶憶之
- 14b1 kidume > dartai andande geli ongoro dabala > adarame  
思慕して たちまちのうちにまた忘れるだけだ どうして  
而旋忘之 烏能
- 14b2 mujilen de hadafi wajiyaarakū ome mutembi ni >>  
心に釘付けにして放り出さないことができるかね  
往來於心而不去乎
- 14b3 aikabade jalan ci lakcafi encu saikan be ucarafi  
もしも この世に絶えてない別格の美しさに出会って  
若夫 以絶世之姿
- 14b4 geli haji gūnin-i tuwašatara be alici > terei  
また愛しい心で面倒を見ることを受け入れれば その  
而邀多情之盼 其
- 14b5 mujilen de hadafi waliyame jenderakūngge > yargiyan-i  
心に釘付けにして放り出すに忍びない 本当に  
往來於心而不能去者 有不啻
- 14b6 urme kangkara adali kengkešeme buyere ci encu  
飢えて喉が乾くように焦がれて愛するのとは違って  
載饑載渴之慕而已矣
- 14b7 akū kai >> genere nashūn uju mariha bade kimcici >  
いるのだ 去りゆく機会に頭を巡らせたところで詳らかにすれば  
臨去回頭
- 15a1 tere niyalma-i haihū icangga be aifini tutame buhe  
あの人のたおやかで心地よい姿をとっくに残して与え  
伊人之風韻不早颺下也哉
- 15a2 akū semeo >> toro ilha dogon buru bara de > nimaha

- ないのか 桃の花の渡し場は渺茫として 魚を  
渺渺桃園 早絶
- 15a3 butara niyalma-i jugūn fambuhangge kejine be dahame >  
とる人の 道に迷い込んだのにしばらく従い  
漁人之路
- 15a4 udu geteci emgeci gūniha seme > jiduji ai tusa >  
いくら目覚めていても考えていたと 結局は何の益になるか  
雖寤寐思服 究奚益也
- 15a5 joo bai > andubure de isinarakū kai >> sungari bira  
もう十分だ 思い切るのには及ばない 銀河は  
已矣 不如颺下矣 悠悠銀漢<sup>7</sup>
- 15a6 goro golmin de > han gurun-i elcin-i fase yabuci  
遠く長いので 漢の国の使いの筏が行くのに  
難乗漢使之槎
- 15a7 mangga be dahame > udu mujilen-i dolo tebuhe seme >  
難儀しているのに出会い いくら心の中にあるといっても  
雖中心藏之
- 15b1 geli ai tusa > nakaki bai > hasa andubuci acambi kai >>  
また何の益になるか やめたいな さっさと思い切るべきである  
又何濟也 休矣 盖蚤颺下矣
- 15b2 andubuha sehede > weri an-i weri ombi > beye an-i beye  
諦めたと言ったので 他人の慣例通りで構わない 自分の慣例通り  
颺下 則彼自彼也 我自我也
- 15b3 ombi >> tere anggala sakda eme-i fafungga cira be >  
で構わない まして 老母の 厳格さを  
況 堂上之冰霜<sup>8</sup>
- 15b4 weihuken-i necici ojarahū > ai hacin-i kiduha seme >  
軽々しく挑発できない あれこれと思慕したら  
不敢輕犯 而懸想
- 15b5 inu mekele suilara de ombi >> andubuha sehede > gūnin

- また虚しく苦勞するのである 思い切ったと 心  
亦屬徒勞 颯下 則
- 15b6 fakcashūn ombi > mujilen hūwaliyan akū ombi >> tere  
が離れた 心が穏やかではない その  
情已離也 意難洽也 況
- 15b7 anggala takūršara hehei hendure alarangge > dembei  
上 走り使いの娘の言う嘆願は 極めて  
侍女之語言 殊多
- 16a1 idun nimecuke > ai hacin-i gusucuhe seme > ele untuhuri  
粗野で厳しい 諸々色々と悩ましいと ひときわ虚しい  
嚴肅 而悒快 幾成虚
- 16a2 gūnire de isinambi >> jai haha niyalma-i yabun >  
と思い至る また男の人の行い  
願 且 男子之行事
- 16a3 lashalame mutere be dele obumbi > andubuki seci > andubure  
決断ができることを貴しとする 思い切りたければ思い切る  
貴乎能斷 欲颯 則竟
- 16a4 dabala > ainu ojarahū aliyafi teni uttu yabuha ni >>  
ただ なぜできない 待つてようやくこのように来たのだ  
颯下矣 豈必有待而後為此乎
- 16a5 amba haha-i gūnin > forgošome bahanara be ele dele  
大人の心 転換するのが上手なことをますます貴しと  
丈夫之志氣 尤貴乎善反
- 16a6 obumbi > andubiki seci > andubure dabala > geli we  
する 思い切りたければ思い切るだけだ また誰  
欲颯 則自颯下矣 將誰教
- 16a7 tacihiyafi teni uttu mutehe ni >> udu tutu seme  
教えて やつとこのようにすることができた いくらそのように  
之而後能然乎 雖然
- 16b1 andubuki seci > niyalma be adarame andubu sembi >> tere

- 思い切りたいと言っても 人をどうやって思い切ると言う あの  
待欲颺也 教人怎颺哉 彼
- 16b2 gebungge boo-i sargan jui > elhe sain-i bisirengge labdu >>  
名門の 女の子 安らかで良くあるもの多い  
夫名門之媛 殊多静好
- 16b3 aikabade gūnin majige acingiyabuha ba biheni > uthai  
もし 心を小さく動かしたことがあったら すなわち  
苟意有所觸 則感
- 16b4 munahuūn-i nasame sejileme > ini cisui andubume jenderakū  
いらいらと嘆いてため息をつき おのずから思い切るに忍びない  
嘆無聊 自有不忍颺者
- 16b5 bade > bithei niyalma-i umesi saišacuka be ai hendure >>  
のに 書生の極めて良しとすべきものはいうまでもない  
而況書生之可慕耶
- 16b6 damu sula yabure antaha > elhe simeli-i dosorongge  
もっぱら自由に歩く客 やすらかにひっそりと我慢すること  
維茲羈旅之士 最多寥寂
- 16b7 labudu >> udu takaha gucu be dartai acacibe > hono  
たくさんある どんなによく知った友人とつかの間会ってもなお  
即偶遇知己 猶
- 17a1 urgunjere gasarangge sasa isiname > ainaha seme andubume  
喜びと泣くことが一緒に来て どうしても思い切って  
感泣隨之 必有不能颺者
- 17a2 muterakū bade > tere gege iletu bisire be ai hendure >>  
できないのにあの女の子が明らかに実在するのは言うまでもない  
而況伊人之宛在耶
- 17a3 te mimbe targaburengge bifi > hendure gesun > sain be  
今 私を戒めるものがあって 言う言葉 よいのを  
斯時有戒予者 曰 賢賢易
- 17a4 saišame boco be guribumbi sehe be > aifinici bithe

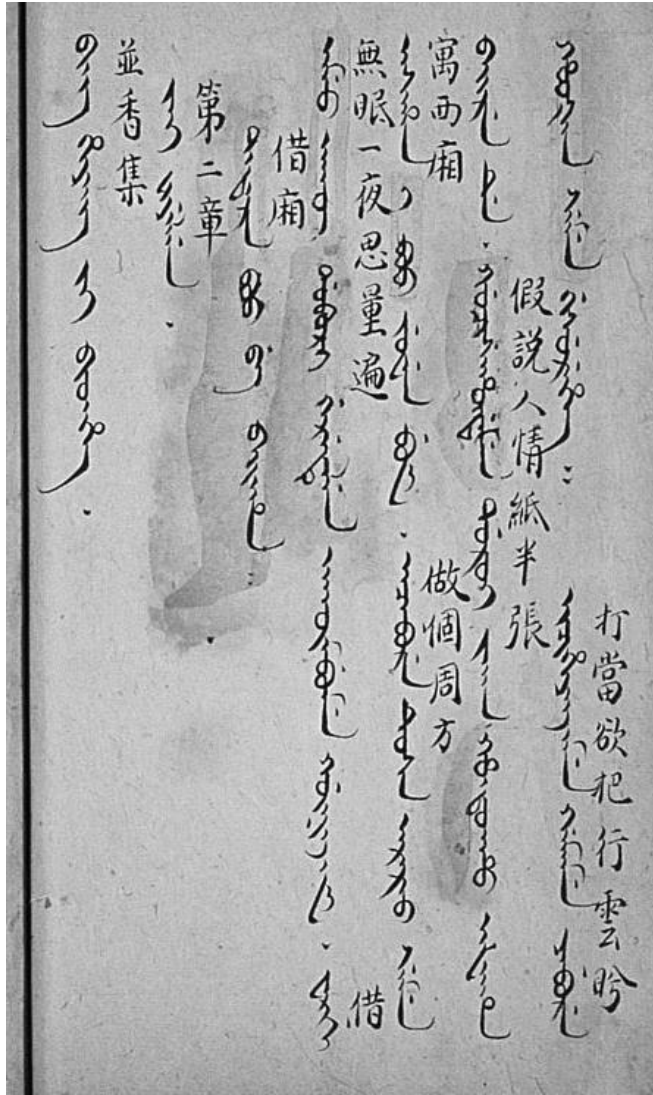
- 賞賛して容色を移すと言ったことを 兼ねてから書  
色 久垂書冊矣<sup>9</sup>
- 17a5 dangse de ejeme arahabi > aiturgunde emdubei ede  
物に書きつけて記した なんの理由でひたすらこのように  
胡為依依於此也
- 17a6 narašambi seme tafulacibe > oncohon umušuhun nakarakū  
思い焦がれるとなだめるけれども仰向けになつたりうつ伏せたり  
をやめない  
然而輾轉反側
- 17a7 kurbušere de > gūnin farfabufi > mujilen hūlimbufi > tere  
輾轉反側するので 心乱され 心惑わされ あの  
意已痴而神已迷 彼
- 17b1 buyecuke gege > maka ai arga bifi mimbe yarume ici be  
愛らしい女の子 一体どんな方法で私を導いて方向に  
美人兮 不知何以牽我而俱去也
- 17b2 dahame genehe ni seme tulbire de > andubuki seci > bahanambio >>  
したがって行くのだと推量するので 思い切りたくても 可能か  
欲颺也 得乎
- 17b3 te geli mimbe huwekiyeburengge bifi > hendure gisun > gu adali  
今また私を鼓舞するものがあって 言う言葉 玉のような  
斯時 又有勉予者 曰 有女
- 17b4 sargan jui bi sehe be > algišahai sain baita obufi  
娘がいるということを喧伝している 良いこととして  
如玉 傳為美談矣
- 17b5 gisurehebi > ainu urnakū ede boboršombi seme tacihiyacibe >  
言っている なぜ必ずこのように大いに愛惜すると教えても  
何必戀戀於此也
- 17b6 tookanjame ilinjame emdubei narara de > fayangga samsifi >  
ためらって立ち止まりひたすらうつつを抜かすので魂が離散して  
然而低徊流連 魂已消而腸已



- 17b7 duha lanacafi > fujurunga yangsangga sain sargan jui >  
 はらわたが断ち切れ 上品で艶やかなよい娘  
 斷 窈窕淑女
- 18a1 maka ya inenggi teni bahafi gala be jafafi sasa  
 はていつの日によやく得て手をとって一緒に  
 不知何日攜手而同行也
- 18a2 yabuha ni seme tubišere de > andubuki seci > mutembio >>  
 歩くのかと推測するので 思い切りたければ できるか  
 欲颺也 能乎
- 18a3 tangū sejen duka de isifi > niyalma jafara doru >  
 百輛の車が門に近づき 人を娶る方法  
 非不知百兩盈門 婚<sup>10</sup>禮有不容苛
- 18a4 ainame ainame gamaci ojarahū be sarkūngge waka >  
 どうやってどうやって解決できないの知らないのではない
- 18a5 tuttu seme enenggi gūnici > dorolon kooli-i bisire  
 そのように言って今日考えれば 礼を言う道理がある  
 由今日思之 而禮法在所不及持
- 18a6 babe waliyafi tuwakiyame jabdurakūngge > bi yarigiyān-i  
 ところを投げ捨ててわきまえてきちんとしないこと 私は本当に  
 者 吾誠無如此
- 18a7 ere mujilen be ainame muterakū oho >> gin > se > jung  
 この心をどうしようもできない 琴 瑟 鐘  
 心何 非不知瑟琴
- 18b1 tungken be faidame > sargan gajara kooli > inu cisui  
 太鼓を並べ 娘を娶る法 おのずから  
 鍾鼓 佳偶自有良辰
- 18b2 sain inenggi bisire be sarkūngge waka >> tuttu seme  
 良き日があることをわからないのではない そのように言って

- 18b3 yasai juleri gūnici > juru holbom acabure babe  
目の前で考えたら 一对の配偶が成立するところに  
由目前思之 而配偶有所不及候者
- 18b4 jurcefi aliyame jabdurakūngge bi dubentele ere  
逆らって待ってきちんとしないこと 私は終わるまでこの  
吾終無如此情何
- 18b5 gūnin be ainame muterakū oho >> mini gūniha niyalma  
心をどうしようもできない 私の思う人  
意中人
- 18b6 si inu sahao > kemuni sara undeo >>  
あなたも知っているのか やはりまだ知らないのか  
其知也耶 其不知也耶
- 18b7 hoo seme ufuhu niyaman-i dorgi ci arame tucibufi<sup>11</sup> >  
澎湃と肺と心臓の中から 作り 吐き出して  
盎然 從肺腑中流出
- 19a1 gūnin šumin > gisun getuken ojoro jakade > niyalma  
心が深く 言葉が正確なので 人  
情深而文明 令人
- 19a2 minggan jalan-i onggolo gūnin mujilen be gūnime  
千代の前に心を思って  
想見千古情思
- 19a3 bahanaci ombi >> yargiyan-i yasai dolo tuwa jaleo<sup>12</sup> >>  
得れば可能だ 本当に目の中から火が ?  
真正眼裡火出
- 19a4 mujilen-i dolo yasai muke canggi oki sembi kai >>  
心の中 涙だけがありたいというよ  
心中涙泪<sup>13</sup>也

参考 『満漢並香集』第二章冒頭部分



参考文献

荒木典子(2018) 『『満漢並香集』訳注(一)』、『人文学報』第513号(第12分冊):21-40。

---

\*本研究は JSPS 科研費 JP16K21261 の助成を受けたものです。

- 1 早田輝洋・寺村政男(2004)『大清全書 本文編』:7 を参考にした。
- 2 人情紙半張:『満漢西廂記』第二章、張生が寺の部屋を借りるために法本和尚に銀一兩を渡す場面で、“秀才人情紙半張” šusai doroi jaka daci hontofo afaha hoošan-i adali (1/14a-7) (秀才の心付けはもとより半分の紙の如し) とある。
- 3 打當欲把行雲吟:準備して行って行く雲を見よう。“打當”は「準備する」の意。何を準備するのか。『西廂記』では明刊本、第六才子書本いずれにも“且將這吟行雲眼睛(兒)打當”とある。宮原民平『国訳西廂記』(1921、国民文庫刊行会)では「且つ這の行雲を盼む眼睛兒もて打當(みは)らん」とする。「美人を見るための目を準備しておく」という解釈である。『満漢西廂記』第二章ではこれを taka ere yabure tuji be hargašara yasai faha be sargabuki (1/12a-3) (しばらくこの行く雲を仰ぎ見て目の玉を楽しませたい) と訳するが、“打當”に対応するものが見当たらない。本作品では、icihyanjame gammae が“打當”に対応している。icihyanja- は、福田昆之・編『満洲語文語辞典』によれば「事情を考慮しつつ処理する」の意味。
- 4 措大:貧乏書生。『西廂記』第二章には見られない語彙。
- 5 前回同様、ここまでがこの章の内容に基づいたオリジナルの詞。第一章はここに詞牌名が書かれていなかった。詞牌名がある場合、満文の進行に合わせたため、詞が詞牌の左側にあるのに“右詞” ucun-i gebu となってしまうねじれが生じる(荒木 2018:22)。
- 6 待颺下教人怎颺:八股文の「題」に当たる部分。満漢文ともに『満漢西廂記』第二章(1/20a-2)に見られるものと一致。“颺下”は、投げ棄てる、心の中より取り去ること、思い切るの意味。
- 7 漢: bira は「河」。『時藝』では“河”とするので、本作品の誤写と思われる。
- 8 堂上之冰霜:『満漢西廂記』第二章(1/19b-6)に“夫人節操凜冰霜” fu zin-i jalangga tuwakian juhe gecen-i gece nimecuke (夫人の節操を守らせることは氷や霜のごとく厳しい) とあるのを踏まえる。
- 9 賢賢易色久垂書冊矣:“賢賢易色”は『論語』学而編に見える。色を好む気持ちは賢者を尊敬する心に変えることができるという意味。
- 10 婚:『時藝』では“昏”とする。
- 11 arame tucibufi:“流出”に相当する部分であるが、ara-は「作る、決める、書く」などの意味。待考。
- 12 jaleo: このように見えるが意味不明。
- 13 泪:実際には口偏のように見える(『時藝』も)。